

欧州語の喚情統語論

－形式的統語論から機能的統語論に向けて－

本 城 二 郎

1. 序論

欧州語は、シンタグマや法要素などが発話文の“中心”構造を構成する一方、FSP 語順や小詞、焦点構文や独立従属節など“周辺”要素は、発話修正を担うことにより多様な喚情文を形成する。本論では、発話文構成の3レベル（シンタグマ・レベル、法レベル、FSP レベル）のうち、形式的な前2者と機能的な FSP レベルから、欧州語の主要な喚情文の諸例を比較分析し、喚情性の諸類型の抽出を通じて、“喚情統語論”の有効性を検証する。

2. 機能統語論と喚情統語論の概要

2. 1. 機能的文構成 (FSP) と機能統語論の体系

機能的文構成 (FSP) とは、文の Th (テーマ)・Tr (移行)・Rh (レーマ) 分割のことで、文要素が文中で果たす伝達機能 (FSP 機能) に応じて配列される文構成を意味する。無標では、基本配列である Th・Tr・Rh 語順により伝達価値の漸進的発展に向かい、その結果、FSP 基本機能構造 (FSP 基本配列) を実現することになる。文の機能構造の中心をなすのは、定動詞の TME (法・時制カテゴリー表示子) 要素で、それが固有に担う TrPr (移行プロパー) の仲介・連結役割を通じて、文全体は言語外現実と結びつき現実発話となる。他方、文内の機能構造の中心をなすのは、定動詞の概念内容部分で、それが担う Tr (移行) 役割を通じて、文内構造は要素の機能的結束 (Th・Rh ネクサス) を可能にする。

なお、Th 要素が細分化される場合、Th 要素中で最も低い伝達価値をもつものと最も高い伝達価値をもつものをそれぞれ ThPr (テーマ・プロパー) と DTh (ダイア・テーマ) とし区別する一方、Rh 要素が細分化される場合、Rh 要素中つまり文要素全体中で最も高い伝達価値をもつものを RhPr (レーマ・プロパー) とし、より低い伝達価値をもつ Rh 要素と区別する。これに上記の Tr 要素2分割 (TrPr・Tr) も加えた結果、下記の FSP 基本配列が提起される。なお、各要素の詳細は、Svoboda(1989)、Firbas(1992)を参照。

●FSP 基本配列：ThPr-(ThPro-)Th-DTh-TrPr-(TrPro-)Tr-Rh-RhPr

2. 2. 喚情的文構成 (ESP) と喚情統語論の諸概念と特徴

(伝達) 機能統語論を具体化する機能的文構成 (FSP) が無標伝達文における機能要素 (Th,Tr,Rh) の構成を扱うのに対して、喚情統語論を具体化する喚情的文構成

(ESP:Emotive Sentence Perspective) は、無標伝達文に主に修正・付加が加えられた後の有標伝達文における機能要素または発話文全体の構成および喚情性を扱うことから、所謂“有標機能”統語論の一種と位置づけられる。その際、加えられる修正・付加としては、たとえば主観的語順 (Rh-Th) に代表されるような語順修正や IC・小詞・間投詞等モダリティ表示子 (ME) の付加などが一般的で、通言語的にも頻用され、(スラブ語やバルト語など) 所謂“自由語順”を持つ言語では汎用されている。これらの付加・修正手段により実現する喚情文は、IC 付加や疑問詞付加や倒置語順などにより直接的にモダリティ表示を実現する疑問文、それに (否定小詞、願望小詞等) 小詞付加や (命令法、条件法等) 動詞の法および両者の協力により間接的にモダリティ表示を実現する否定文、命令文、それに祈願文などと同様、主観的モダリティ表示文と見なされているが、多様な形式的バリエーションの存在や文法化されていない点で、大きく異なる。他方、喚情文を扱う喚情統語論は、FSP 原理における無標性 vs. 有標性の対立とそこから派生する伝達文 vs. 喚情文の対立に主要な基礎を置くことから、その説明原理と分析法については FSP 原理のそれと類似か同一のものであるべきだが、用いられる諸概念と特徴は異なると考えられる。このような認識から、先駆者 J. Firbas による疑問文・否定文・命令文のための FSP 分析モデル^{*1}に倣い、筆者により、以下のような喚情文分析のための諸概念とその特徴および分析モデルが提起され、統語論の新たな分野として喚情統語論が提案された。

[喚情文分析のための諸概念] :

EmFoc(Emotive Focus)喚情フォーカス : 喚情文中最大 CD 度要素つまり RhPr 要素
 EmFocA(Emotive Focus Anticipator)喚情フォーカス導入詞 : 喚情フォーカス
 (RhPr) 要素に先行し、それを発話文中に誘導する語句

[喚情文分析の特徴] :

喚情文には、話し手がある情報を受けて、自身に i. “驚き、確認、同意”等の感情 (Emotion) が喚起され、ii. それを受け手に明示的または非明示的にアピールする、という 2 つの機能がある。i の機能は喚情性を表示する手段、すなわち定動詞のモダリティ表示子 (ME)、疑問詞・小詞・間投詞・小詞化接続詞等の形態および焦点構文・分裂文・分割文・反復文・主観的語順等の形式により、ii の機能は、話し言葉では IC 付加、書き言語では感嘆符付加により、それぞれ行われると考えられる。

[喚情文の分析モデル] :

喚情文の EFSP :

チェコ語 : Ten je ale ^{*2} hloupý ^{*1}! (あいつは、なんて馬鹿なんだ!)

Ten je ale hloupý! (あいつは本当に大馬鹿だ!)

分析 1.

Ten	je	<u>ale</u>	<i>hloupý!</i>
	AofQ:TrPr-Tr	TrPro	Sp:RhPr

TME EmFocA 喚情モダリティ表示子>Rh 性 EmFoc

解釈： **ale**:ME>EmFocA 喚情モダリティ表示子 ⇒ EmFoc(=RhPr)

分析 2.

Ten	je	ale		hloupý!
	AofQ:TrPr:Tr	TrPro>>レーマ化>RhPr		Sp:RhPr>>テーマ化>>Th
		TME	EmFocA 喚情モダリティ表示子>Rh 性	= EmFoc

解釈： **ale**:ME>EmFocA 喚情モダリティ表示子=EmFoc(=RhPr) /喚情の強調/

2. 3. ブルノ統語論グループとチェコ語喚情文

20 世紀の初頭に中欧の中心都市プラハの地に始まり、世界の言語学研究に貴重な貢献を果たし、その先見性から今なお多大な影響を与え続けている言語学研究の主要な潮流の一つが“プラハ言語学派”と呼ばれている。他方、その流れから少なからず影響を受けつつ、並行的に進められてきた言語学研究（とりわけ統語論研究）のグループがチェコのブルノの地に興り、スラブ語および他の多様な言語をも対象とする統語論研究を花開かせたことは、あまり良く知られていない。“ブルノ統語論グループ”^{*3}と称され、統語論全般に渡り幾つかのユニークな知見を残している。そのうちの 하나가、“喚情統語論”で、伝達文を扱う統語論の中心分野に対して、喚情文を扱う周辺分野の統語論として位置づけられている。主な言語学者としては、M. Grepl（チェコ語統語論）、J. Firbas（英語統語論）、R. Večerka（古代教会スラブ語統語論）等が挙げられるが、スラブ語全体の広範な比較を通じて喚情統語論（別名、派生統語論）の重要性と可能性について提起したのは、R. Mrázek（ロシア語—スラブ語比較統語論）である。そのルーツには、ブルノに近代的な言語学研究の基礎を根付かせた R. Jakobson（ロシア語・スラブ語・一般言語学・詩学）や B. Havránek（スラブ語）や J. Vachek（英語）等の偉大な先人の足跡からも明らかである。その後の流れとしては、A. Svoboda（英語—チェコ語比較統語論）や P. Karlík（チェコ語統語論）等の統語論諸研究の中に練磨・集約されている。

3. 欧州語喚情文の形式的特徴と機能的特徴

3. 1. 欧州語喚情文の形式的特徴

欧州語は、喚情性表示のための文法手段として、イントネーションなど（韻律的手段）の他に、分割文/反復文や分裂文、それに主観的語順など統語的手段や疑問代名詞/指示代名詞、小詞、間投詞（またはそれらの組合せ）など語彙的手段が慣用化されている。各欧州語間の相違は、それら文法手段の使用分布により特徴づけられる。以下、本節では、その形式的特徴を明確に抽出することが比較的困難なイントネーションは除外し、さらにその（具体的には焦点化や有標化など）機能的特徴から統語形式のバリエーションを列挙することが容易な主観的語順や分裂文は次節に委ね、主に語彙・統語的手段の喚情性について欧州語の比較分析を試みる。

分析の対象としては、各言語圏を代表し多様な類型を示す以下の言語を当てる。

英語/独語 (SVO/V2nd タイプ)、仏語/イタリア語 (分析 SVO/(S)VO タイプ)、バスク語 (屈折 SOV タイプ)、アイルランド語 (屈折 VSO タイプ)、チェコ語 (屈折 SVO&固定前倚辞&自由語順タイプ)、ブルガリア語 (屈折>分析 SVO タイプ)、ロシア語 (屈折 SVO タイプ)、アルバニア語/リトアニア語 (屈折 SVO&自由語順タイプ)、フィンランド語 (膠着 SVO&一部自由語順タイプ)、マルタ語 (内屈折(S)VO タイプ)

●語彙的手段による喚情文

・疑問代名詞や指示代名詞による喚情文

疑問代名詞による喚情文は、欧州語で汎用されており、とりわけ西欧語や東スラブ語や南スラブ語に頻用されている。指示代名詞による喚情文は、疑問代名詞に次ぎ頻用され、特に英語の“so”タイプやチェコ語の“tak (大変くそう)”タイプは、欧州語全体で大多数広い使用域を持つ。通時的には、元来の身振りに伴う直示的機能から喚情的機能の発生が明らかである。

① 「ここはなんて快適なんだ (ろう) !」

英語: Here is how comfortable! 独語: Hier ist, wie bequem! (*Ich frage mich, wie wohl hier!*)
仏語: . Voici comment comfortable! イタリア語: Ecco quanto è comodo! バスク語: Hemen da nola eroso! マルタ語: Hawnhekk ghandek kifkomda! アイルランド語: Seo é an chaoi compordach! チェコ語: Tady je jak pohodlné! ブルガリア語: Ето колко удобно! ロシア語: Вот как удобно! アルバニア語: Këtu është se si të rehatshme! リトアニア語: Štai kaip patogu! フィンランド語: Tässä on miten mukava!

指示代名詞による喚情文は、疑問代名詞に次ぎ頻用され、特に英語の“so”タイプやチェコ語の“tak (大変くそう)”タイプは、欧州語全体で大多数広い使用域を持つ。通時的には、元来の身振りに伴う直示的機能から喚情的機能の発生が明らかである。

●小詞・陳述副詞による喚情文

小詞・陳述副詞による喚情文は、チェコ語の“to”タイプ、英語の“really”タイプに代表される強調文で、古代の直示語“to”の同一音形残存や、陳述文の陳述副詞化などにより文法化された文形式で、次第に前者の後退と後者の汎用への傾向が顕著となりつつある。

② 「雨が降ってるんだ! <雨がふっている>

英語: It is really raining! 独語: Es regnet wirklich! 仏語: Il pleut vraiment! イタリア語: Davvero sta piovendo! バスク語: Da benetan eurria! マルタ語: Huwa verament ix-xita! アイルランド語: Tá sé ag cur báistí i ndáiríre! チェコ語: Je to opravdu prší! ブルガリア語: Той е наистина вали! ロシア語: Это действительно идет дождь! アルバニア語: Ajo është me të vërtetë bie shi! リトアニア語: Tai tikrai lyja! フィンランド語: Se on todella sataa!

●間投詞による喚情文

間投詞による喚情文は、間投詞および様々な間投詞化表現の使用は、欧州語では感嘆的喚情文に特徴的である。文は、自身が喚情性付加を表示する一方、他の喚情機能要素と

の結合も実現する。欧州語の中には、東スラブ語のように、より多くの間投詞を付加する傾向のものもあれば、他方、より制限的に間投詞を使用するような言語もある。

③ 「おっと、なんて寒いんだ！」

英語： Oops, that's cold! 独語： Ups, das ist kalt! 仏語： Oups, c'est froid! イタリア語： Spiacenti! Oops, che è freddo! バスク語： Ene, hori da hotza! マルタ語： Issa! Oops, li huwa kiesah! アイルランド語： Oops, go fuar! チェコ語： Jejda, to je zima! ブルガリア語： Опа, това е студено! ロシア語： Ой! К сожалению, это холодно! アルバニア語： Oops, kjo është ftohtë! リトアニア語： Oi, tai šalta! フィンランド語： Oh, se on kylmä!

●統語的手段による喚情文

統語的手段による喚情文は、欧州語全体に観察され、未だ実例分析や理論化が相対的に多いとは言えないものの、感嘆的喚情文の主要なタイプになりうるものと考えられる。具体的には、分割文/反復文、喚情与格付加、それに独立従属節が汎用されている。

[分割文の例]：分割された各要素に IC が置かれ、Rh 要素の連鎖による“取立て”が実現される。

④ 「我々は、保管部屋を貸しましょう。中心地近くで。5年(契約で)」

英語： We'll rent warehouse space. Near the center. For five years.

独語： Wir werde Lagerfläche mieten. Nahe dem Zentrum. Seit fünf Jahren.

仏語： Nous allons louer entrepôt. Près du centre. Pendant/pour cinq ans.

イタリア語： Abbiamo affittare spazio di magazzino. Vicino al centro. Per cinque anni.

バスク語： Biltegi espazioa alokatzen ditugu. Erdian gertu. Bost urtez.

マルタ語： Ahna se kera mahzen spazju. Hdejn il-ic-centru. Ghal hames snin.

アイルランド語： Déanfaimid cíos spás stóras. In aice leis an t-ionad. Ar feadh cúig bliana.

チェコ語： Pronajmeme skladové prostory. Poblíž centra. Na pět let.

ブルガリア語： Ние ще се наеме складови площи. В близост до центъра (на града).

За пет години.

ロシア語： Мы будем арендовать складские помещения. Недалеко от центра.

В течении пяти лет.

アルバニア語： Ne do qira hapësirë depo. Në afërsi të qendrës. Për pesë vjet.

リトアニア語： Mes nuoma sandėlio erdvę. Netoli centro. Penkeriems metams.

フィンランド語： Vuokraamme varastotilaa. Lähellä keskustaa. Viideksi vuodeksi.

[喚情与格の例]：

⑤ 「雨がふっているんだよなあ！」

英語： It is raining on me! 独語： Es regnet auf mich! 仏語： Il pleut sur moi! イタリア

語： Piove su di me! バスク語： Euri niri erortzen! マルタ語： Huwa ix-xita fuqi!

アイルランド語： Tá sé ag cur báistí ar dom! チェコ語： Prší na mě! ブルガリア語： това

е вали на мен! ロシア語: Идет дождь на меня! アルバニア語: Ajo është shi mbi mua!
リトアニア語: Lyja ant manes! フィンランド語: Sataa minua!

[独立従属節の例]:

強い喚情性を表示する手段としては、チェコ語に代表される所謂“独立従属節”すなわち主節の省略により独立した従属節が観察される。これらは、チェコ語の下位タイプとしての“že～(～ということ)”など接続詞に導かれるものとともに、歴史的には、疑問詞疑問文を起源とする喚情文と見なされる。

- ⑥ 「貴方がこれに気付かなかったのだ!とは!」 < 「～のに、~~私は驚いた~~」
英語: (It is) That/As you didn't notice this! < ~~I was surprised~~ that
独語: Dass/Wie bemerkte Sie dies nicht! < ~~Ich war überrascht~~, dass
仏語: Que/Comme vous n'a pas remarqué cela ! < ~~J'ai été surpris~~ que
イタリア語: Chel/Come non hai notato questo! < ~~Sono rimasto sorpreso~~ che
バスク語: Da ez duzula hau nabarituko! < ~~Harritu nintzen~~
マルタ語: Huwa li inti kienx mhux avviz dan! < ~~I kien sorpriz~~ li
アイルランド語: Is nach raibh tú faoi deara é seo! < ~~Bhí ionadh orm~~ nach
チェコ語: Že jste si toho nevsimli! < ~~Divím se~~, že
ブルガリア語: Че ли не забеляза това! < ~~Учудих се~~, че
ロシア語: (То.) Что вы не заметили этого! < ~~Я был удивлен тем~~, что
アルバニア語: Që ju nuk e vërejnë këtë! < ~~Unë kam qenë i befusuar~~ që
リトアニア語: Kad jums nepastebejo tai! < ~~Aš buvau nustebęs~~, kad
フィンランド語: Et huomannut tätä! < ~~Olen yllättynyt~~, ettet

3. 2. 欧州語喚情文の機能的特徴

本節では、欧州語の発話文の喚情性に関するのと見なされる機能形式の2種、すなわち i. 焦点化小詞・構文/分裂文による喚情文、それに ii. FSP 語順による喚情文(すなわち主観的語順)の機能的特徴を探るべく、具体例の比較分析を試みる。なお、喚情性表示のための通言語的手段として汎用されるイントネーションの機能的特徴については、その抽出が比較的困難なことから、除外されるが、必要な場合には、触れることにする。なお、以下の諸例では、喚情性表示の手段(喚情性表示子)は、喚情的文構成における喚情フォーカス導入詞(EmFocA)役割を担い、全て下線・斜線で表示される。

i. 焦点化構文/分裂文による喚情文

焦点化構文による喚情文とは、後方照応代名詞によって発話文の Th 要素または、Rh 要素の先取りを可能にするか、あるいは前方照応代名詞によってすでに焦点化された Th 要素または Rh 要素の発話文中での再述を可能にするような“取立て”構文を指し、一般的に広く用いられ、汎欧州語的と見なされている。形式的には、IC 付与の焦点化要素は、発話文本体から分離されることになる。語彙的には、指示代名詞や人称代名

詞さらには副詞が前方照応または後方照応役割を担っている。通例、先行文の焦点化 Th が頻用される一方、Rh 先取り代名詞は比較的稀である。語彙的傾向としては、一方では焦点化前方照応語が指示代名詞か人称代名詞か名詞かにより、他方では前置化名詞とその代名詞コピーとの形態的一致の強弱により区分可能である。Th 焦点化の特殊構文としては、英語タイプ“*With regard to/Speaking of*”（～に関して/～と言えば）、仏語タイプ“*En ce qui concerne*”（～に関しては）、チェコ語タイプ“*Pokud jde o*^{対格}”（～に関する限り）などが汎用されている。

- ⑦ 「その売り子はと言うとに関しては、彼女はどこか他の所に配属された」

＜「その売り子は、どこか他の所に配属された」

英語： *With regard to/As for/Speaking of* the salesgirl, she was assigned anywhere else.

独語： *Im Hinblick auf/Apropos* die Verkäuferin, sie anderswo zugewiesen wurde.

仏語： *En ce qui concerne/ En parlant de* la vendeuse, elle a été affectée à nulle part ailleurs.

イタリア語： *Per quanto riguarda i/A proposito de* la commessa, è stata assegnata altrove.

バスク語： Salmenten neska *dagokionez/ du hitz*, berak beste inon sinaturik.

マルタ語： *Fir-rigward/ Tahdit* tal-tfajla bejgh, hija kienet assenjat imkien iehor.

アイルランド語： *Maidir leis/ Ag labhairt di ar* an cailín díolacháin, sannadh sí aon áit eile.

チェコ語： *Pokud jde o* prodavačku, byla přidělena kdekoliv jinde.

ブルガリア語： *Що се отнася до* продавачката, тя е присвоен никъде другаде.

ロシア語： *Что касается* продавщицы, она была назначена нигде.

アルバニア語： *Në lidhje me* vajzës shitjes, ajo ishte caktuar kudo tjetër.

リトアニア語： *Kaip ir* ligoninė, ji buvo paskirtas niekur kitur.

フィンランド語： *Osalta* myynti tyttö, hänet sijoitettiin missään muualla.

分裂文による喚情文は、典型的なタイプのレーマ化構文としては、チェコ語の“Byl to 'on, který/kdo ... +関係節”があげられる。ここでは、無標の場合、主節中の文脈依存の（代）名詞主語が焦点化される結果、RhPr（レーマ・プロパー）要素として IC（イントネーション・センター）を担う一方、文脈独立の関係節全体が Th（テーマ）要素としての解釈を受ける。他方、有標の場合、後者すなわち関係節に IC が移り、その結果、主節の焦点文部分のレーマ機能が弱められることになる。この構文は、歴史的には、フランス語の常套句“C'est..., qui...”から英語（“It is...that...”）やスラブ語へと浸透していったタイプで、文体的に有標な文語の手段とではあるが、翻訳やその他エッセーなど欧州語に影響を受けた文体や分やでの使用に限られることはない。欧州語内でも、特に前方照応要素（形式）の組合せ可能性の点で、部分的相違が存在する。

- ⑧ 「私が昨日会ったのは、彼だった」＜「私は、昨日彼に会った」

英語： *It was* he *whom* I met yesterday. <I met him yesterday/ Yesterday I met him.

独語 : Er war(es,) den ich gestern getroffen. < Ich traf ihn gestern/ Gestern traf ich ihn.

仏語 : C'est lui que j'ai rencontré hier. < Je l'ai rencontré hier.

イタリア語 : È stato lui che ho incontrato ieri. < L'ho incontrato ieri.

バスク語 : Norekin ezagutu nuen atzo zuen zen. < Berarekin ezagutu nuen atzo.

マルタ語 : Kien hu li ltqajt mal bieraħ. < Ltqajt mieghu bieraħ..

アイルランド語 : Ba é an té a bhuaile mé inné. < Bhuaile mé leis inné.

チェコ語 : Byl to ten, kterého jsem potkal včera. < Potkal jsem ho včera.

ブルガリア語 : Той беше този, когого срещнах вчера. < Аз го срещнах вчера.

ロシア語 : Это был он, которого я встретил вчера. < Я встретил его вчера.

アルバニア語 : Ishte ai që e kam takuar dje. < Kam takuar atë dje.

リトアニア語 : Tai buvo tas, kurį sutikau vakar. < Sutikau jį vakar.

フィンランド語 : Se oli hän, jonka tapasin eilen. < Tapasin hänet eilen.

ii. FSP 語順による喚情文 (主観的語順)

FSP 語順による喚情文(主観的語順)とは、無標の FSP 基本配列が実現する客観的 Th-Rh 語順から逸脱した有標の Rh-Th 語順 (またはそのバリエント) をさし、単にイントネーションを伴う要素の CD (伝達動力) 度の漸進的下降のみならず (発話) 文の担い手である話者の伝達内容に対する主観的・個人的さらには喚情的態度をも表示する。伝達内容は、その際、話者による評価 (例えば、意外性、驚き、注意喚起) を受けることになる。

⑨ 「ただ雪と風だけがこのような魔法をかけることができるんです」

< 「雪と風は、このような魔法をかけることができる」

英語 : Only snow and wind(,) it can be applied such magic./分割文 = 主観的語順/

< It is snow and wind that can be applied such magic./分裂文 = 客観的語順/

独語 : Nur Schnee und wind(,) kann es solche Magie angewendet.

< Ist es Schnee und Wind, der sein kann solche Magie angewendet.

仏語 : Seulement la neige et du vent(,) qu'il peut être appliqué à cette magie.

< C'est la neige et du vent qui peut être appliqué à cette magie.

イタリア語 : Solo neve e wind(,) che può essere applicato tale magia.

< È neve e vento che può essere applicato tale magia.

バスク語 : Elurra eta haizea bakarrik (,) aplikatu ahal izango dira, hala nola, magia.

< Elurra eta hori aplikatu ahal izango, hala nola, magia haize da.

マルタ語 : Biss borra u r-riħ (,) jista 'jigi aplikat tali magic.

< Huwa borra u r-riħ li jistgħu jigu aplikati tali magic.

アイルランド語 : (Nil) ach sneachta agus gaoithe (,) is féidir é a chur i bhfeidhm draíochta den sórt sin. < Is sneachta agus gaoithe is féidir a chur i bhfeidhm draíochta den sórt sin.

チェコ語： *Jen* sníh a vítr (,) to může být použito takové kouzlo. ☞ 話者による“意外性”評価

EfocA Rh Th

< Je sníh a vítr, který může být použit takové kouzlo.

ブルガリア語： *Само* сняг и wind(,) може да се прилага такава магия.

< Е сняг и вятър, които могат да бъдат приложени като магия.

ロシア語： *Только* снег и ветер (,) он может быть применен такой магии.

< Это снег и ветер, который может быть применен такой магией.

アルバニア語： *Vetëm* bora dhe era (,) ajo mund të aplikohet magji të tillë.

< Kjo është bora dhe era që mund të aplikohet magji të tillë.

リトアニア語： *Tik* sniegas ir vėjas (,) jis gali būti taikomas toks magija.

< Tai sniego ir vėjo, kurie gali būti taikomos tokios magijos.

フィンランド語： *Vain* lumi ja tuuli (,) sitä voidaan soveltaa tällaisia taikuutta.

< On lunta ja tuuli, joita voidaan soveltaa tällaisia taikuutta.

主観的語順としては、Rh-Th 語順が一般的であるが、言語により主要な語順原理が異なる（すなわちチェコ語のように無標 FSP 語順である Th-Rh 語順を遵守するタイプに対して英語のように無標文法語順である S-V-O 語順が優位であるタイプもある）ため、一義的に Rh-Th 主観的語順の有標性を決定することは出来ず、その結果、喚情性と非喚情性の間の境界が曖昧になることから、両性は連続体として捕らえる必要がある。つまり、喚情性表示語順の連続体：有標 FSP 喚情 Rh-Th 語順 > 無標文法喚情 Rh-Th 語順 > 有標文法非喚情 Rh-Th 語順 > 無標 FSP 非喚情 Rh-Th 語順。主観的語順のバリエーションとしては、Th-Rh-Th 語順（通常は Rh 文末第 2 位置）が汎用されるが、上記の文頭 Rh 語順と較べて喚情性への関与が低く、個人の使用にはあまり特徴的とは見なされない。

4. 結論

欧州語の喚情文の比較分析を試みた結果、以下の語彙的・統語的特徴が抽出された。

i. 形式的特徴としては、語彙的手段による疑問代名詞（英語 *how*/仏語 *comment*/バスク語 *nola*/マルタ語 *kif*/アイルランド語 *an chaoi*/チェコ語 *jak*/アルバニア語 *se si të*/リトアニア語 *kaip*/フィンランド語 *miten* 等）および小詞・陳述副詞（英語 *really*/仏語 *vraiment* /バスク語 *benetan*/マルタ語 *verament*/アイルランド語 *i ndáirire*/チェコ語 *opravdu*/アルバニア語 *të vërtetë*/リトアニア語 *tikrai*/フィンランド語 *todella* 等）による喚情文がほぼ均一的に汎用されている。統語的手段による喚情文は、分割された IC 付加 Rh 要素による“取立て”を実現するほぼすべての分割文、喚情与格、それに強い喚情性を表示する独立従属節（英語 *That/As* ~ /仏語 *Que/Comme* ~ /バスク語 *Da* ~ /マルタ語 *Huwa li* ~ /アイルランド語 *Is nach* ~ /チェコ語 *Že* ~ /アルバニア語 *Që* ~ /リトアニア語 *Kad* ~ /フィンランド語 *Et* ~ 等）が汎用されている。ii. 機能的特徴としては、焦点化構文の喚情文（英語 *With regard to/Speaking of* ~ /仏語 *En ce qui concerne* ~ /バスク語 *dagokionez* ~ /マル

タ語 *Fir-rigward* ~ /アイルランド語 *Maidir leis* ~ /チェコ語 *Pokud jde o* ~ /アルバニア語 *Në lidhje me* ~ /リトアニア語 *Kaip ir* ~ /フィンランド語 *Osalta* ~ 等)、典型的なレーマ化構文としての分裂文による喚情文 (英語 *It was...who ...* /仏語 *C'est ...que ...* /バスク語 *Norekin ... zuen zen* / マルタ語 : *Kien ... li ...* /アイルランド語 *Ba é ...a ...* /チェコ語 *Byl to ...kterého ...* /アルバニア語 *Ishte ...që e ...* /リトアニア語 *Tai buvo ..., kuri ...* /フィンランド語 *Se oli ...jonka ...* 等) が一般的である一方、主観的語順を表示する有標の Rh-Th 語順は、スラブ語やバルト語など無標 Th-Rh 語順遵守タイプに対して英語や西欧分析タイプ言語など無標 S-V-O 文法語順優位タイプがあり、言語により主要な語順原理が異なるものの、FSP 語順の喚情性の階層 (有標 FSP 喚情 Rh-Th 語順 >>> 無標 FSP 非喚情 Rh-Th 語順) の範囲内で、程度の差こそあれ、汎用される傾向がある。

(注) ※¹ 具体的には、Firbas(1992)中で提起された分析モデルを参照。

※² 太字は IC (イントネーション・センター) 付加要素を、斜字体はフォーカス (Foc:RhPr) 要素を、(細) 下線は喚情フォーカス導入詞 (EmFocA) を、☞ 記号は観察結果・注記を、太下線は FSP 要素部分を、それぞれ示す。以下、同様。

※³ このグループの詳細に関しては、Mrázek(1985)を参照。

参考文献 :

Firbas, J.(1992): *Functional sentence perspective in spoken and written communication*, Cambridge University Press:Cambridge.

『言語学大辞典セレクション：ヨーロッパの言語』1998年、三省堂：東京。

Grepl, M.(1967): *Emocionálně motivované akualizace v syntaktické struktuře výpovědi (Emotionally Motivated Actualization in the Syntactic Structure of Utterance)*, Brno.

本城 二郎 2018: 「欧州語の比較文型論—プラハ学派文型理論に基づく欧州語文型の構築に向けて—」西日本言語学会第48回研究発表会ハンドアウト。

Karlík, P. & Svoboda, A.(1982): *Skladba češtiny pro cizince (Syntax of Czech Language for Foreigners)*, UJEP:Brno.

Kurzová, H.(1999): “Syntax in the Indo-European Morphosyntactic Type,” *Journal of Indo-European Studies Monograph* №3:Washington D.C.

Mrázek, R.(1985): “Emocionalita slovanské věty (Emotionality of Slavic Sentence)” *SPFFBU* A33:Brno.

Svoboda, A.(1989): *Kapitoly z funkční syntaxe (Chapters from Functional Syntax)*, SPN:Praha.

Wikitravel:会話集一覧 (2014)